

誰もが輝く
まちづくりを
めざして

み い な

みんなで

いっしょに

なかよく



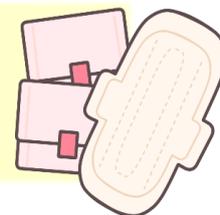
バックナンバーはこちら

▶問い合わせ 市民協働推進課 ☎0287(62)7019



今回のテーマ

「生理の貧困」



「生理の貧困」とは？

経済的な理由から、ナプキンやタンポンなどの生理用品の購入ができない「生理の貧困」。

「学生の5人に1人が、生理用品の入手に苦労している。」など、日本でも生理の貧困が広がっています。生理の出費は、ナプキンではありません。生理痛がひどい人は鎮痛剤がなければ学校や職場に行くどころか、日常生活さえままならないのです。

生理の貧困をめぐる世界でも問題となっており、制度や法律を変えるほどになっています。背景にあるのは、女性たちの声なき声がシェアされるようになったこと。さらに、各国では女性議員の数が増えており、女性の視点を入れた法改正が進むようになったことなどがあります。経済的な貧しさや格差の問題だけではなく、「女性全体にかかわる不平等」として捉えるべきだとの声もあがっています。

実は「生理の貧困」、昔からあったようですが、新型コロナウイルスによる経済悪化によって表面化されました。このままでは、新型コロナウイルスが終息しても生理の貧困はなくなる、重大な問題です。

「生理の貧困」の実態

いま、女性たちから悲痛な声が上がっています。経済的な支援だけで解決するものではなく、生理は女性の体の特長なことであることが理解されていません。

- 節約のために生理用品を交換する頻度を減らしている
- 生理用品を満足に使えない（使わせてもらえない）から外出しにくくなった
- 生理用品が買えない（買ってもらえない）から学校に行けない
- トイレトペーパーで、ナプキンやタンポンの代用をしている
- 恥ずかしくて生理のことについて相談できない（理解者がいない）



また、食料等の無料配布を行っている、隅に置いてある生理ナプキンが一番最初になくなることもあるそうです。ある学校では、生理で下着と制服を汚してしまった生徒には生理用のショーツと制服を貸し出しますが、後日同じサイズの生理用ショーツを購入し、借りた制服はクリーニングをして学校に返却しなければならないといわれています。果たして貧困世帯にそれができるでしょうか。

本来、誰もが等しく生理を快適に過ごし、社会参加する権利が保障されるべきではないでしょうか。

「みいな」編集会議に参加した、渡辺市長のことは

今まで男性が女性の生理について、なかなか言いづらい部分がありました。それについて考えていくことには非常に意味があります。

生活が困窮している方に対しては、生理用品だけではなく、食料品や生活用品の支援などのセーフティーネットをしっかりとやっていかなければならないと考えています。



未来にむけて

こうした問題を改善しようと、海外では政府が生理用品を無料で配布したり、軽減税率を導入したりする取り組みが広がっています。日本政府も、コロナ禍の女性支援の交付金の中に、生理用品の無料配布が含まれることになりました。ボランティアによる支援活動なども、少しずつ増えてきているようです。

また、数はまだまだ少なすぎるものの、日本政府の中にも影響力のある女性が出てきました。女性が活躍することにより、これまでの男性中心社会では置き去りにされていた問題が可視化され、解決に向けて動くことが可能となってきています。

政治や経済など社会のさまざまな層で女性が意思決定に関わることで、生きづらさが解消される人が増えるのではないのでしょうか。

生理を快適に過ごすということは、基本的な人権・尊厳にかかわる部分だと思います。もっとこの問題を社会で認知して、生理のある人にとって生きやすい、やさしい社会を作りたいと思っています。

誰もが気軽に生理の話ができる未来に、期待しています。

みなさんは、「生理の貧困」についてどう考えますか？



毎年6月23日から29日までの1週間は

「男女共同参画週間」です。

男性と女性が、職場で、学校で、地域で、家庭で、それぞれの個性と能力を発揮できる「男女共同参画社会」を実現するためには政府や地方公共団体だけでなく、国民のみなさん一人ひとりの取組が必要です。私たちのまわりの男女のパートナーシップについて、この機会に考えてみませんか？

キャッチフレーズ

「女だから、男だから、ではなく、私だから、の時代へ。」

